

開演前に

客入れ中

客電がついていて音楽が流れている。

中央に椅子が1つ置かれている。

開演10分前に毛糸を持った男登場。

椅子に座り、黙々と編み物を始める。

開演直前にナレーションが入る。

ナレ

『本日は超人予備校旗揚げ公演『鶴に恩返し 例えば火の鳥の飲む麦茶』および『ド素人による公開編み物ショウ』にお越しいただき、誠にありがとうございます。開演に先立ち2・3注意事項がございます。今すぐメモの用意をしてください。

ウソです。まず、1つ目、

「迂闊に人の言うことを信じるとろくなことがない」と平気で言う友達とは縁を切ってください。ろくなことはありません。

半分ウソです。2つ目、

携帯電話など音の鳴る機器は音の鳴らないようにしてください。ハッキリ言って電源を切ってください。

これは本当です。節にお願いいたします。3つ目、

飲食は禁止です。本当です。我慢してください。

そして、4つ目、

だから2・3の注意事項はウソです。

他の劇団と比べ、当劇団は比較的、役者がかむことがございます。気にしないでください。

お願いですから気にしないでください。

ごめんなさい。

さて、言い訳がましくなりましたが、以上の2点を守ってご鑑賞くださいますようお願いいたします。

願いたします。」

ナレーションが終わると共にジワジワ照明が落ちていく。
やがて、編み物をする男の姿も消えて暗闇に。

1 青い鳥がやってきた

軽快な音楽が聞こえる。が、ノックの音が音楽を断ち切る。
暗闇の中で聞こえる男（春木）の声。

春木 『はい！・・・ガチャ。うわっ！』

一瞬にして明るくなり、そこにいるのは春木と、なぜか大きな鶏。
ここは春木の部屋。

春木 「何だ！お前！」

鶏 「私は幸せの青い鳥。」

春木 「白いだろ！」

鶏 「あおい輝彦という人もいますから。」

春木 「いるけど。」

鶏 「あなたは幸せになりたくないのですか？」

春木 「・・・いや、なりたいです。」

鶏 「では、お聞きします。あなた、生命保険入ってますか？」

春木 「帰れ！生命保険の勧誘か？！！！！」

鶏 「違います。ただ入ってなかった場合、せめて1か月だけでも入ってもらおうかと思
つただけです。」

春木 「生命保険を新聞みたいに勧誘するな。」

鶏 「あなたは幸せになりたくないのですか？」

春木 「いや、なりたいです。」

鶏 「幸せを呼ぶ壺が10万円で」

春木 「いらない！」

鶏 「今ならほがらかな青い鳥がついてくる。」

春木 「もっといららない。お前、青い鳥じゃないし、白いし。」

鶏 「赤井英和という人もいますから。」

春木 「いるけど。」

鶏 「神を信じないのですか？」

春木 「信じない。」

鶏 「じゃあ、諦めましょう。」
春木 「勧誘の仕事向いてないよ。」
鶏 「あなたは幸せになりたくないのですか？」
春木 「いや、なりたいです。」
鶏 「人の腸には何億という菌が存在しているのです。」
春木 「ヤクルトですか？」
鶏 「えっ?!」
春木 「ヤクルトの勧誘ですか？」
鶏 「いえ、それは気のせいです。ギクッ！」
春木 「ギクッとしたよね？」
鶏 「いえ、定期的にギクッとすることになっているもので。」
春木 「ウソのつけないタイプだな。」
鶏 「ハー、あなたを勧誘できるものは何もあります。」
春木 「どうもなさそうだねー。」
鶏 「それでは本題に入ります。」
春木 「やっ和本題か？」
鶏 「あなたは幸せになりたくないのですか？」
春木 「本題も一緒なのか？」
鶏 「なりたいんですか？なりたくないのですか？」
春木 「いや、なりたいです。」
鶏 「幸せにしてあげましょう。」
春木 「本当にできるのか？」
鶏 「任せてください。」
春木 手にしていたカバンを覗き込み。
鶏 「あんパンとジャムパンどっち食べる？」
春木 「狭い範囲の幸せだな。」
鶏 「さっきから文句ばかり。」
春木 「普通言うだろう。」
鶏 「色が違うとか色が違うとか色が違うとか、そんなことばかり。」
春木 「1つだけだね。」
鶏 「あなたは間違ってます。」
春木 「お前に言われたくないなー。」
鶏 「青い鳥とはあなたの考えているようなものではありません。チルチルとミチルは旅を終えて、自分たちが飼っていた鳩だと気づくのです。・・・ほら！」
春木 『ほら』ってお前どう見ても鳩じゃないだろう？」
鶏 「人を見かけで判断しないでください。」

春木 「お前、鳥だろ？」

鶏 「そんなことはどうでもいいのです。この童話が意味すること、すなわち・・・子供の勘違い。」

春木 「話の価値観が大きく揺らぐ解釈だな。」

鶏 「勘違いから始まるのが幸せ。」

春木 「違うと思うよ。」

鶏 「いいえ、そうなのです。では、あなたにお聞きます。あなたにとって幸せとはなんでしょうか？」

春木 「えっ？幸せ？・・・お金に困らなくて、時間があって、それから」

鶏 「ほんとにそれが幸せですか？」

春木 「いや、えっ？どうだろう？」

鶏 「あなた、何かを忘れてしまったんじゃないですか？」

春木 「あつ、そうかもしれない。」

鶏 「私は忘れ物を届けにきたのです。幸せという忘れ物を。」

春木 「お前、本当に青い鳥なのか？白いけど。」

鶏 「私はあなたの青い鳥。あなたの心が空ならば必ず真っ白な鳥が住むのです。」

春木 「まあ、白いよな。鶏みただけど。」

鶏 「私はあなたの心の隙間を埋めにきました。ドーン。」

春木 「お前、『笑うせえるすまん』かよ。」

鶏 「心の中の大切な物を無くした人の心の中に飛び込んで、大切な物を取り戻し、無くした人に届けてあげる。それが私達、青い鳥の仕事。人の幸せが私の幸せ。」

春木 「もし、本当に青い鳥だったら、幸せを届けてくれないか。」

鶏 「あなたの忘れ物、届けてよろしいですね。」

春木 「・・・はい。」

鶏 「明日、お届けします。」

春木 「ありがとう。よろしく頼むよ。」

鶏 「前金として2000円いただきます。」

春木 「えっ？金いるの？」

鶏 「はい。だって青い鳥ですから。」

照明が青く変化する。

2 火の鳥ハンター

照明元に戻る。

ここは役所の受付。

登場するおじいさん（山吹紋次郎）。何かを探しているようだ。

受付の女性が声をかける。

受付 「あー、何かお探しですか？」

紋次郎 「はい。」

まだ探し続ける紋次郎。

受付 「何をお探しなんですか？」

紋次郎 「はい。……ここは市役所です。」

受付 「ええ、そうです。」

紋次郎 「いろんな届出をするところです。」

受付 「その通りです。」

紋次郎 「でも、大事な届出書類がありません。」

受付 「だから、それはなんなんでしょう？」

紋次郎 「人間国宝です。」

受付 「はい？」

紋次郎 「人間国宝です。わしも人間国宝になろうと思って。」

受付 「人間国宝になるためには、人より秀でたものが必要になってきますが」

紋次郎、大いに照れながら

紋次郎 「いや、それほどものでも。」

受付 「だから、どこが秀でているか教えてください。」

紋次郎 「わしは世界唯一の火の鳥ハンターです。」

受付 「火の鳥ハンター？……ってなんですか？」

紋次郎 「火の鳥ハンターというのは、火の鳥をハントするんです。あつ、火の鳥を捕まえるんです。」

受付 「ハントの意味はわかります。」

紋次郎 「火の鳥の生き血を飲めば、永遠の命が手に入りますからな。飢餓に苦しむ人々や難病に苦しむ人々を救うことができますからな。」

受付 「火の鳥っているんですか？」

紋次郎 「火の鳥っているんですか？」

受付 「私が聞いているんです。」

紋次郎 「いるんでしょうな。ここに火の鳥ハンターがいるぐらいですから。」

受付 「見たことはないんですか？」

紋次郎 「ありません。捕まえかけたことはあるんですけど。」

受付 「どういう状態ですか？」

紋次郎 「それは秘密です。一子相伝の技術ですからな。」

受付 「では、今まで1度も捕まえたことないんですか？」

紋次郎 「はい。何せ伝説の動物ですからな。」

受付 「よくそんなことで今まで生活できましたね。」

紋次郎 「火の鳥ハンターだけでは生活できませんので、夜は『鳥貴族』で働いとりました。」

受付 「昼は火の鳥、夜は焼き鳥ですか。」

紋次郎 「アハハハハ、そいつはおかしい。」

おなかを抱えて笑い出す紋次郎。

受付 「いえ、そんなつもりで言ったんじゃないんですけど。」

紋次郎 「いえ、ユーモアは大切です。あつ、笑いは大切です。」

受付 「ユーモアぐらいわかります。」

紋次郎 「というわけで『鳥貴族』を首になったので、国からの補助金をいただくと思います。してな、人間国宝になりましたというわけです。」

受付 「人間国宝ってそういうものじゃないんですけど。あの……少なくとも自分で申請するものではないんですが。」

紋次郎 「そうですか？ということは待ってたらくるんですか？」

受付 「待ってたらくるものじゃなくて、選ばれるものなのです。」

紋次郎 「じゃあ、いつわしは選ばれるのかのう？」

受付 「いや、まだ選ばれると決まったわけじゃないので。」

紋次郎 「どうしてです。世界中の困ってる人を救えるんですよ。わしの他に誰が火の鳥の居

場所がわかりますか？火の鳥を捕まえられますか？火の鳥ハンターのわししかいません。どこに問題があるんじゃないやろうな。まあ、火の鳥がいればの話ですけど。」

受付 「そこが問題なんです！」

紋次郎 「どこです？」

辺りを探す紋次郎。

受付 「そうじゃなくて、いるかないかわからないんでしょう？」

紋次郎 「わからないんでしょう？いないとは限らんです。いたらどうします？たっくさんの人を見殺しにしますか？」

受付 「いや、見殺しだなんて。」

紋次郎 「なんと言ってもわしは、世界一役に立つ人間ですからな。」

受付 「世界一の役立たずかもしれないじゃないですか。」

紋次郎、急にきつい目で受付の女性を見る。

受付 「いや、そういうつもりじゃ」

紋次郎 「アハハハハハハ、そいつはおかしい。」

受付 「笑いごとじゃありません。」

紋次郎 「それならそうかもしれません。役に立つか役立たずか誰にもわかりません。わしは火の鳥ハンターとして生まれました。火の鳥ハンターとして育ちました。70年以上やっとります。何と言われてもやり続ける覚悟があります。それだけです。」

受付 「はあ・・・なんといいのか私には。」

紋次郎 「帰ります。『果報は寝て待て』と言いますからな。」

紋次郎去って行く。

受付 「火の鳥ハンターを人間国宝に？・・・課長！大事件です！」

受付の女性、走り去る。

照明、赤く変化する。

3 火の鳥についての会議

舞台上手の幕が巻き上がる。

そこには編み物する男が座っている。

相変わらず黙々と編み物を続けている。

幕は下がり、照明が元に戻る。

そこには会議用の長机。

椅子に座った7人の男女。

課長は初老といった感じ。

宮本はもっと老けてそうな感じ。

川上はまだ若手といった感じ。

以上、3名は男性。

中山、田中はお局的存在になりかかっている。

木村はそろそろベテランになりかかっている。

先程の受付はまだまだ新人といった感じ。

以上、4名は女性。

課長 「それでは諸君の忌憚のない意見から聞こう。」

川上 「なんのですか？」

課長 「君は話を聞いていなかったのかね？」

川上 「聞いてました。けどさっぱりわかりません。」

課長 「君、もう一度話してあげなさい。」

受付 「はい。昨日、自分のことを火の鳥ハンターだと名乗るご老人がお越しになって、人間国宝になりたいとおっしゃったんです。」

課長 「それでは諸君の忌憚のない意見を。」

川上 「だから、何を話合うんですか？」

課長 「今、聞いただろう。」

川上 「じゃあ、自分を火の鳥ハンターだと名乗る老人に人間国宝をあげるかどうか話し合
うんですか？」

6人無言で拍手。

川上 『おめでとう』といった感じの拍手はやめてください！』

課長 「君は何か不満があるのか？」

川上 「当たり前でしょう。火の鳥ハンターですよ。そんな仕事どこにあるんですか？」

宮本 「本人も行ってるように世界唯一なんだよ。珍しいんだよ。」

川上 「必要ないからいいんですよ？」

宮本 「バカだなー。たくさん火の鳥ハンターがいたら、火の鳥が絶滅してしまうだろ？」

川上 「絶滅しません。火の鳥なんていないんだから。」

中山 「ちよつと待ってください。論点がずれました。今、話し合うべき点は火の鳥がいる
かどうかではなく、その老人を人間国宝にするかどうかでしょうか？」

川上 「いや、この部分を避けて通ったら、結論なんて出ないですよ。」

中山 「詭弁だわ。」

川上 「会議の真つ当な手順ですよ。」

課長 「君、話題をちゃんと戻したまえ。」

川上 「えっ？僕の方が悪いんですか？」

うなづく6人。

川上 「えっ？・・・じゃあ、人間国宝を決める権利なんて僕達にあるんですか？僕達、地
方公務員なんですよ。」

課長 「それは市長から『君達に任せる』と言われてるんだ。この課の統一見解を市長に

持って行って、それから市長の判断を仰ぐんだ。」

川上 「ということは僕達が人間国宝にすると決めたら、その方向で進むんですね。」

中山 「あなたは老人を人間国宝に推したいんですね。」

宮本 「さっきまで否定してたくせに。」

川上 「違いますよ。例えばの話です。人間国宝だなんて規模が大きすぎて、地方公務員の僕達では決められないですよ。」

課長 「だから、そこは人間国宝にするとかの大それたことじゃなくて、地方自治体として補助金を出した方がいいか、どうかで話してみてもどうかな。」

川上 「ああ、それなら、まだ、話せます。でも、人間国宝と補助金はほとんど関係がないんですけどね。」

中山 「細かいわねー。」

川上 「大事なところだと思っただけだなー。」

宮本 「補助金っていくらぐらいだろう？」

木村 「老人一人ぐらいだったら、せいぜい20万円ぐらいじゃないですか？」

中山 「じゃあ、決定！」

川上 「ちよっと待ってください。決めるのは早すぎるでしょう？」

中山 「話聞いてないの？決めるのは市長なのよ。」

川上 「でも、それまだ、統一見解じゃないじゃないですか。」

中山 「結局、決めるのは市長だからいいんじゃない？」

川上 「ダメです。ここで僕達がちゃんと話し合わないと意味がないじゃないですか？それが僕達の仕事でしょう。」

木村 「もう、さっきからなんなんですか！僕達の仕事とか言いますが、私達の仕事って一体なんなんですか？！大事なことを忘れてます。」

課長 「そう！その通り！今、そう言おうとしてたところだった。」

木村 「私達の仕事は、どうでもいいことをダラダラ話し合っつて、結論を出してもどうせいつの間にかひっくり返っちゃうから、結論を先延ばしにすることでお金をもらうことなんですよ。」

全員、うつむいて沈黙。

課長 「いや、違う！」

川上 「否定するまで、時間かかりましたねー。」

木村 「課長、心配しないでください。軽い冗談ですから。」

課長 「かなり重かったよ。」

川上 「さあ、話を戻しますよ。皆さんの意見をハッキリさせましょう。老人に補助金をあげるべきか、あげるべきじゃないかを示してください。」

課長 「そういうことなら、私はあくまでもオブザーバーとして見させてもらおうよ。君達もその方がいいだろう。私と違う意見だと気まずいだろうし。まあ、少しだけ格好つけて言わしてもらえば、私はみんなの意見を聞いてから、自分の意見を決める男だ。みんなの意見は私の意見だ。つまりは私はみんなだ。だから、みんなは私だ。」

川上 「課長、もうわけがわからなくなってますよ。ジツとしていいですから。それでは補助金をあげるかあげないかどちらかに決めてください。挙手でいきましょう。」

宮本 「挙手は無いんじゃないかな？意見がわかってしまう。」

川上 「わからせるためにやるんです。話が進まないじゃないですか。いいですね。」

中山 「ダメよ！・・・いいわ。」

川上 「なぜ、今、否定したんですか？」

中山 「ちよっと逆らいたくなっただけ。気にしないで。」

川上 「余計気になりますよ。いいですね。いきますよ。老人に補助金を挙げた方がいいと思う人。」

手を挙げる受付、木村、宮本。

視線は受付に。

受付 「だって、代々伝わってる技術なんですよ？それにあの老人が人生を費やしてきたもんなんだから、きつと意味のあるもんなんですよ。」

木村 「私も全く同意見です。いいじゃないですか、火の鳥ハンターって夢があつて。」

川上 「それ同意見じゃないですよ。」

宮本 「いいんじゃないの。あげるべきだって言うのは同じなんだから。」

川上 「あなたはどうなんですか？」

宮本 「まだ火の鳥がいないと決まったわけじゃないんだから。少しでも可能性があるんだつたら、保護して行く必要があるんじゃないのかね？」

川上 「それについては後で反論します。それでは老人に補助金をあげなくていいと思う人。」

手を挙げる川上、中山、田中。

川上 「まさかあなたが僕と同意見だなんて。あの態度からは全然そう見えませんでした。」

中山 「意見としては、だいたいあなたと一緒に。でも、結局、あなたが嫌いなね。まあ、ただ生理的に受け付けられないだけだから。」

川上 「それひどいですよ。理由もなく嫌われてるだけなんですよ？」

中山 「人間なんだからしょうがないでしょ。」

川上 「ほんとにもう！・・・あつ、さつきから一言も喋ってないですよね。どうぞ、発言

してください。」

田中 「はい。意見を言う前に、私は今、非常に憤りを感じています。なぜ、こんなにムダなことに時間を割かないといけないのかと思います。これは税金のムダ遣いです。どうして、一番大事なことを見逃してしまうのか不思議です。いいですか？ハッキリと言います。この世の中に火の鳥という生き物はいません！」

川上以外の一同が「おおーっ」という声を挙げる。
やがて納得。

川上 「僕、始めに言ったじゃないですか！そしたら、話を戻せって課長が。」

課長、そっぽを向く。

川上、宮本に。

川上 「あなた、さっき火の鳥がいないと決まったわけじゃないって言ってませんでした？
少しでも可能性があればって？」

宮本、そっぽを向く。

川上 「あれ？」

田中 「私は絶対に根拠や裏づけの無いものを認めることはできません。」

照明が暗くなる。

下手の幕が巻き上がる。

そこにいるのはアナウンサー。

アナ 「ニュースです。本日、午後2時30分、奈良県明日香村の高松塚古墳から新たな壁画が発見されました。この壁画は火の鳥とその火の鳥を捕まえた男性の姿が描かれています。その男性の絵の下には『山吹門左衛門』という文字が添えられていたそうです。この壁画が意味することはなんなのか？日本考古学界にとって非常に重大な発見であり、古代の日本を読み解く鍵として、一日も早い説明が待たれています。以上、ニュースでした。」

下手の幕が降りる。

照明元へ。

田中 「いましたね、火の鳥。」
川上 「そういうことになるんですか？」
田中 「高松塚古墳ですよ。明らかに根拠になるじゃないですか。根拠があるならみとめます。」
川上 「古墳から絵が出ただけですよ。」
田中 「古墳は永遠に残るものとして作られてるんですよ。そんなに尊いものにいい加減なものを描くわけじゃないじゃないですか。その上にこの男性の絵の下に『山吹門左衛門』の文字があるんですよ。役所に来た老人の名前は『山吹紋次郎』。火の鳥ハンターの血が受け継がれているわけですよ。古代から現在まで受け継がれてきた技術があるんです。それはもう文化財とっていいんじゃないですか？」
川上 「本当に受け継がれているかどうかわからないんですよ。確かめることができないんだから。」
田中 「ほら、新聞にも載ってるでしょう。江戸時代に『山吹紋太郎』という人が徳川家康に捕えた火の鳥を献上したところ、『偉い』と褒められたと。」
中山 『偉い』と褒めるって言うのが微妙ねー。」
田中 「飛鳥時代、江戸時代、現代、見事に1本の線につながってます。」
川上 「それブツギレですよ。」
宮本 「あつ、2対4になったからって言いがかりつけるのはよくないよ。」
木村 「そうですよ、こんな、しっかりした根拠が出てくる来てるんですよ。認めてもいいじゃないですか。・・・夢があつて。」
川上 「なんでもそこに持つて行くのはやめてください。」
田中 「これだけの証拠があるのにまだ否定するんですか？」
川上 「おかしいでしょう。火の鳥を捕まえたことがあるんなら、火の鳥ハンターは死なないんじゃないですか？火の鳥の生き血を飲めば永遠の命なんだから。」
宮本 「だから、それはさあ、捕まえてから動物愛護の精神が芽生えたんじゃないか？」
木村 「そうですねー、傷つけたら可哀想だし。」
宮本 「そうそう、凄く後悔したんだろうなー。」
川上 「後悔したんなら、伝えなくていいじゃないですか。おかしいですよ。」
木村 「じゃあ、今も生きてるのよ。」
川上 「投げやりだなー。」
木村 「そもそも永遠の命が素晴らしいって誰が決めたんですか？限りある命の方が尊いって『銀河鉄道999』にも書いてあるわ。火の鳥ハンターはそれに気づいたのよ。」
川上 「それなら火の鳥ハンターを辞めればいいでしょう。」
木村 「仕事は仕事として割り切ってやってるのよ。」
川上 「仕事になつてないから、焼き鳥を焼いてたんでしょう。」
受付 「そう、焼き鳥を焼きながら待ってたんですよ、ずっと。いつか自分が役に立つ時が

来るかもしれないって。そうやって待ちながらいずれ死んで行く。」

宮本 「よし、補助金だ！」

川上 「おかしいですよ、それ。補助金というより、募金になってる。」

宮本 「金は金だよ。」

川上 「いいですか？おかしなことばかりなんですよ。もし、家康に献上されたんなら、今も家康は生きてないとおかしいんですよ。」

田中 「あなた、今、徳川家康がいたことを認めましたね？」

川上 「それはもちろんいたでしょう。」

田中 「あなた、徳川家康に会ったんですか？」

川上 「会ったことないですけど、日本史の教科書とか文献に残ってるじゃないですか。」

田中 「文献に残っているのなら火の鳥も一緒のはず。しかし、なぜ、家康はいて、火の鳥はいないんですか？」

川上 「いや、それは」

田中 「ちなみにこの論理は京極夏彦の『姑獲鳥（うぶめ）の夏』で京極堂が関口に対していう論理を元にしています。映画版では堤真一が長瀬正敏に対して言っています。まあ、余計な知識ですが」

中山 「ほんとに余計な知識よね。」

照明が暗くなる。

上手の幕が巻き上がる。

そこにいるのは先程のアナウンサーと紋次郎。

アナ 「こんばんは。本日は今やすっかり時の人となった世界唯一の火の鳥ハンター、山吹紋次郎さんにスタジオに来てもらいました。山吹紋次郎さん、こんばんは。」

紋次郎 「こんばんは。」

アナ 「早速、お聞きします。仕事の手順を教えてください。」

紋次郎 「はい。まず、まな板を綺麗に洗います。今朝絞めた地鶏が直送で送られてくるので、手頃な大きさに切ってから塩を軽くふります。」

アナ 「あつ、あのー、山吹さんは緊張のあまり何か勘違いなさってる様子です。それではもう一度お願いします。火の鳥ハンターはどのような手順で仕事をなさるんですか？」

紋次郎 「ああ、そっちの方ですか？」

アナ 「そっちの方です。」

紋次郎 「まず、火の鳥を見つけます。次に火の鳥を捕まえます。」

沈黙。

アナ 「・・・それだけですか？」

紋次郎 「他に何か？」

アナ 「もっと詳しく・・・こうなんて言うか・・・そう火の鳥を見つけるにはどうすればいいんですか？」

紋次郎 「簡単です。空一面に火の鳥雲が出ますからな。その辺りに絶対います。」

アナ 「その火の鳥雲というのは？」

紋次郎 「火の鳥の羽の模様をした雲です。」

アナ 「火の鳥の羽の模様というのは？」

紋次郎 「火の鳥雲と同じ模様です。」

アナ 「・・・はい。私の嫌な予感と同じ答えありがとうございます。それでは肝心な火の鳥の捕まえ方を教えてください。」

紋次郎 「これは難しいです。一言で言うと『エイヤッ！』です。」

アナ 『『エイヤッ！』ですか？』

紋次郎 「いや、『エイヤッ！』です。」

アナ 「じゃあ『エイヤッ！』」

紋次郎 「馬鹿もん！腰がはいつとらん！」

アナ 「言葉の問題じゃなかったんですか？」

紋次郎 「むむむむむ、帰る！」

紋次郎、去って行く。

アナ 「山吹さん、すいません、山吹さん！」

幕が降りる。

照明元に「戻る。」

中山 「昨日、テレビ観ました？」

田中 「観ました！」

中山 「山吹さん、カッコ良かったわー。ずっと応援してきた甲斐ありました。」

川上 「えっ？」

田中 「そうですね。誰よりも先に山吹さんの才能を発見したんですから。」

川上 「何言ってるんですか？2人とも僕と一緒に補助金反対派だったじゃないですか。」

中山 「さあ、何言ってるかわからないわ。」

田中 「そんな昔のこと忘れたわ。」

宮本 「君は昨日のテレビ観てないのかね？」

川上 「観ましたよ、それが？」

宮本 「じゃあ、わかったはずだ。山吹さんがどれだけちゃんとした火の鳥ハンターなのか。」

川上 「わかりませんよ。余計に怪しくなりました。」

田中 「私、あの番組観てボロボロ泣きました。」

川上 「どこですか？泣けるようなところありましたか？」

木村 「あの帰り方、とっても男らしかった。」

中山 「番組の途中で引き上げるあの凛々しい態度。」

田中 「今の軟弱な男達にはないものですよ。」

川上 「ただ我が儘なだけでしょう。」

木村 「頑固親父よね。」

宮本 「頑固親父というよりも星一徹だね。」

課長 「星一徹というよりもタトウだね。」

川上 「タトウは違うでしょう。頑固親父じゃない。」

課長 「どうして君は山吹さんに悪感情を持つんだね？」

川上 「別に悪感情なんて持ってませんよ。」

中山 「一人で補助金を反対しといてよく言うわ。」

田中 「今、人気者だから妬んでるんですよ。」

木村 「テレビでも引つ張りだこなんですよ。」

受付 「今日は6本の番組に出演します。民放5局を制覇した上でNHKの『英語でしゃべらナイト』にも出演します。」

宮本 「今度、コマーシャルにも出るって言うし。」

課長 「CDデビューも決まってるらしいじゃないか。」

川上 「全然、補助金が必要な状態じゃないじゃないですか！」

川上以外の一同。

一同 「あー、わかってない。」

川上 「どっちがです？」

課長 「この街にあんなに偉大な人がいるんだよ。いい宣伝になるじゃないか。」

宮本 「このまま行くと人間国宝も夢じゃないんだよ。」

川上 「何が悲しくて火の鳥ハンターに人間国宝をあげないといけないんですか？あんなのただのポケ老人じゃないですか！」

川上以外の一同、川上の方を見たまま一歩引く。

川上 「……………すみません。今のは言い過ぎました。」

木村、トコトコと近寄る。

川上 「何か？」

木村、いきなりビンタ。

川上 「痛て！」

木村 「紋ちゃんがあなたに何をしたって言うの？謝りなさい。紋ちゃんに謝りなさい！」

課長 「紋ちゃん？」

木村 「ええ、実は私、山吹紋ちゃんと将来的に結婚しようって。」

川上 「あの人、もう将来ないじゃないですか。」

木村、またもビンタの構え。

川上 「ごめんなさい！」

受付 「えっ？あなたも?!」

課長 「えっ？ということは何？」

受付 「ええ、今度のペン習字検定に合格したら結婚しようって。」

川上 「なんだかおかしくなってきましたよ。」

中山 「えっ、あなたも?!」

一同、中山を見る。

中山 「すいません。見え張りました。」

視線が田中に

田中 「私、パスしてください。」

課長 「まあ、2人で良かった。」

川上 「良くないですよ！なんなんですか、この精力的な年寄りはある面、人間国宝だとは思いますが。」

課長 「よし、今のは無かったことにしよう。補助金もちゃんと挙げることにしよう。それで文句ないな？」

川上 「それでいいんですか？」

課長 「それでいい。だってここはお役所なんだから。」

なんとなく納得する一同。

照明暗くなる。

下手の幕が巻き上がる。

そこにいるのはアナウンサー。

アナ 「ニュースです。火の鳥ハンターとして知られる山吹紋次郎さんが全身大火傷の重傷を負いました。本日、午後12時頃、山吹さんが自宅で天麩羅を揚げていたところ、誤って鍋に飛び込み、大火傷を負った模様です。山吹さんは現在、病院で治療を受けておりますが、油断を許さない状態とのことです。この事故につきまして続報が入り次第お伝えいたします。」

幕が降りてくる。

照明元に戻る。

さっきのメンバーから川上がいない。
けだるい雰囲気。

受付 「私、先輩に山吹さん譲ります。」

木村 「いや、私もういらぬわ。」

受付 「いや、先輩に。」

木村 「いや、あなたに。」

中山 「騙された感じねー。」

田中 「ただのボケ爺さんでしたねー。」

宮本 「天麩羅で火傷するような人間に。」

課長 「火の鳥は捕まえられぬだろうなー。」

木村 「もうどうでもいいんじゃないですか。」

一同 「ハアーツ。」

そこに嬉しそうに飛び込んでくる川上。

川上 「皆さん、聞きました？山吹さん、大火傷したらしいですよ！天麩羅とか言ってますけど、本当は火の鳥を捕まえそこねたんでしょ？そうですよね？あー、やっぱり火の鳥ってやっぱりいたんだー。」

やたら感激する川上を無表情に眺める一同。
照明赤く変化。

4 青い鳥がまたもやってきた

上手の幕が巻き上がる。

相変わらず編み物をし続ける男がいる。

男のナレーションが聞こえてくる。

男

『世間の皆さんはきつとこう思ってるに違いない。

「あいつは何をしてるんだろう？」

正解は編み物です。

「男のくせになんで編み物が好きなんだ？」

と思ってる人もいるだろう。・・・大きなお世話だ。そもそも古来、編み物という物は男の物なんだぞ。・・・たぶん。そうだったらしいな。

僕はきつと天使が性別を間違えたんだと思う。覚えておけチンク！

女の子が好きな物が好きだ。

鳥に生まれれば良かった。皇帝。ペンギンなんて、オスの方が子育てする。そっちの

方が僕に向いている。実に楽しそうだ。極寒の中、120日間も飲まず食わずで卵を抱き続けるなんて、とつても、とつても……人間で良かったー!!! あー人間万歳!

幕が降りてくる。

照明が元に戻る。

そこは春木の部屋。

春木が青い鳥を待っている。

春木 「何してるんだ青い鳥?早く来いよ。」

そこに忍び足で入ってくる鶏。

手に紙袋。

そつと紙袋を置いてダッシュして去ろうとする。

春木 「待て!」

春木に止められる鶏。

鶏 「何か?」

春木 「こっちの台詞だ。なんだよ、あれ?」

鶏 「紙袋です。」

春木 「中身だよ。」

鶏 「幸せです。」

春木 「あれが俺の幸せか?」

鶏 「はい。大変苦労しました。行きの交通費だけで経費を使い果たしてしまい、帰りは飛んで帰ってきました。」

春木 「行きから飛べ!」

鶏 「えっ?」

春木 「鳥だったら電車に乗らず行きから飛べよ!」

鶏 「いえ、電車じゃなくてタクシーで。」

春木 「ムダ遣いするな。どこまで行ったんだ。」

鶏 「あなたの生まれた街。」

春木 「……隣町だね。」

鶏 「はい。」

春木 「ほんとにムダ遣いだな。」

鶏 「その代わりにバツチリ幸せをお届けしました。じゃあ、このへんで。」
春木 「待て。なぜ、そう帰りたがる。怪しいな。」

明らかにギクシヤクする鶏。

鶏 「いえ、帰りたがってなどいません。」

春木 「じゃあ、見届ける。」

鶏 「いや、それは。」

春木、紙袋の中を見る。

春木 「えっ？」

もう一度、取り出す。

どこから見てもバナナ。しげしげと眺める。

春木 「バナナ？」

鶏 「バナナ。」

春木 「本当にバナナ？」

鶏 「本当にバナナ。」

春木 「どこが俺の幸せなんだ？」

鶏 「好きでしょ？」

春木 「好きだけど。幸せイコールバナナか？」

鶏 「あなたの生まれた街で買いました。」

春木 「どこでも買える！それに心の中に飛び込むとか言っときながら、隣町行くな。」

鶏 「心の中を覗いたところ、バナナが食べたいと泣いていたもので。」

春木 「物心つく前の話だろう？」

鶏 「幼年期のトラウマが取り払われたでしょう？」

春木 「覚えてないって。」

鶏 「心の隙間が」

春木 「埋まらない。」

鶏 「おや？」

春木 「おや？じゃないだろう。もっとちゃんとした幸せを持ってこいよ。」

鶏 「ちゃんとした幸せ？さあ、私には手に負えません。」

春木 「それが青い鳥の仕事だろう。」

鶏 「ジャンルが広すぎるので、絞ってください。」

春木 「何のために心に飛び込んだんだ？」

鶏 「せめて、いつ頃かだけでも。」

春木 「じゃあ・・・2年前。」

鶏 「2年前と言うとちょうど・・・わかった！別れた彼女に貸したままのCD。」

春木 「違う。」

鶏 「別れた彼女に貸したままの本。」

春木 「違う。」

鶏 「じゃあ、別れた彼女に貸したままの」

春木 「何で物の方にばかり行く？」

鶏 「ということは別れた彼女の方ですね？」

春木 「・・・ああ」

鶏 「ああ、自分の鋭さが怖い。」

春木 「ほとんど言ったんだけど。」

鶏 「彼女を連れてくればいいんですね？」

春木 「いや、今、どうしているか知りたいだけだ。」

鶏 「それだけでいいんですか？」

春木 「それだけでいい。」

鶏 「わかりました。明日の今頃、お知らせいたします。」

春木 「頼んだよ。」

鶏、去りかかるが振り返り。

鶏 「はい。2000円。」

春木 「また、いるの？」

鶏 「もちろん。」

春木 「納得いかないんだけど。」

鶏、ジッと見ている。

春木 「ムダ遣いするなよ。」

しぶしぶ金を払う春木。

照明青く変化する。

5 カラスと宮本

照明元に戻る。
そこは公園。

立ち尽くしているのは先程、市役所にいた宮本。

宮本 「はー、また、ここへ来てしまった。」

そこへやってくる一羽のカラス。名前はミー。

宮本 「おや、君も一人かい？おいで。いいものをあげよう。」

カバンからあんパンを出す。

宮本 「昼をかけそばで済ますとほんの少し余裕ができるんだ。あんパンかジャムパンか悩むのがささやかな幸せさ。さあ、お食べ。」

宮本、半分、カラスに差し出す。

受け取るカラス。でも、なんだかわからないのでしげしげと見てる。

宮本 「君はいいなー自由で。空も飛べるしね。最終のバスを気にすることもないんだろ？
当たり前かー。」

ミー 「おじさん、代わってあげようか？」

宮本 「えっ？・・・何か言った？」

ミー 「カー、カー」

宮本 「そうだよな。カラスが喋るわけないよな。」

ミー 「カー、カー」

あんパンを持ったまま去って行くミー。

宮本 「カラスが鳴くから帰ろう。」

宮本もその場を去る。

奥の幕が巻き上がる。

出てくるのはカゴの中にいる九官鳥。

あるマンションの一室。窓があいてるようだ。

そこへやってくるのはカラスのファー、マー、ミー。

ファー 「何してるの？」

九官鳥 「何が？」

マー 「そんな中でさ。」

九官鳥 「ああ、カゴの中にいるんだ。」

ファー 「どうして？」

九官鳥 「ここが僕の場所だからさ。」

マー 「こんな狭いところが？」

九官鳥 「僕一羽だったら、ちょうどいいよ。」

ファー 「嘘だ！」

九官鳥 「嘘じゃないよ。」

マー 「カラスは元気に空を飛びまわるもんなんだぞ。」

九官鳥 「ハハハハハハハハハハ。」

ファー 「何がおかしいの？」

九官鳥 「僕はカラスじゃない。九官鳥だ。」

ミー 「九官鳥？」

九官鳥 「九官鳥。」

ファー 「九官鳥？」

九官鳥 「九官鳥。」

マー 「九官鳥？」

九官鳥 「九官鳥！」

ファー 「ほんとだ。凄く小さい。」

九官鳥 「だろ？」

マー 「くちばしも黄色い。」

九官鳥 「だろ？」

ファーとマー、声を合わせて。

2羽 「あー、九官鳥じゃなくて良かったー。」

九官鳥 「どうして？」

ファー 「かわいくないし。」

マー 「おしやれじゃないし。」

九官鳥 「君達、真っ黒じゃん！」

フアー 「真っ黒の方がいいよね？」

マー 「中途半端に色がついてるよりね。」

フアー 「何か不気味だよね？」

マー 「きつと人にも好かれないよ。」

九官鳥 「わかってないな。僕は人に飼われてるんだ。」

フアー 「飼われてる？」

九官鳥 「人は僕のような九官鳥が大好きなんだ。」

マー 「そんなことないよ。もし好かれてたら、こんなところに入れられない。」

フアー 「僕達みたいに自由に空を飛んでるはずだ。」

九官鳥 「それは違うよ。君達は人に好かれてないからほっとかれてるだけさ。」

マー 「ハハハハハハハ。」

ミー 「アホー、アホー」

九官鳥 「バカにしないでくれよ。」

マー 「おかしなことを言うからだ。」

フアー 「人が僕達を嫌いだったら、何で毎日食べ物をくれるんだい？」

九官鳥 「食べ物をもらってるの？」

マー 「何も知らないんだな。毎日、ビニールの袋に入れて出してくれるんだ。」

フアー 「僕達が飽きないように食べ物の入ってないハズレの袋と一緒にね。」

九官鳥 「それはたぶんゴミだよ。」

マー 「ゴ」

フアー 「ミ」

九官鳥 「そう、ゴミ。人が要らなくなった物のことだよ。」

マー 「要らなくなった物？まだ、食べられるの？」

九官鳥 「人の食べ残しと腐った物だよ。」

フアー 「あれだけ美味しいのに？」

九官鳥 「これを食べてごらんよ。これは人が僕のために作ってくれたご飯さ。」

マー 「何これ？何だかグチャグチャしてるよ。」

九官鳥 「九官鳥用のすり餌だよ。」

フアー 「まずそう。」

マー 「プーンと臭ってこないものが食えるか。」

九官鳥 「毎日毎日、人は僕のためにこのご飯をくれるんだ。物凄く愛情を注いでくれるんだ。」

僕はその代りに人の真似をする『オハヨウオハヨウ』って。」

フアー 「行こう。わけわかんないや。」

マー 「こいつはカラスの偽物なんだ。偽物の言うことなんて信じられるか。」

2羽去って行く。

2羽 「アホー、アホー」

九官鳥 「ほんとなんだって！人は僕達をお金を出して買うんだ！君達は街を汚すから、嫌われてるんだって！・・・あー言っちゃったー。」

一羽残ったミーが九官鳥に近づく。

ミー 「ねえ、君。」

九官鳥 「あつ、まだ一羽いた。どうして君は行かないの？」

ミー 「さっき言ってたこと、ほんと？」

九官鳥 「ああ、嘘なんてつかないよ。」

ミー 「僕達が食べてたのはゴミ？」

九官鳥 「そうだよ。」

ミー 「僕、この頃、何も食べられなくなってたの。臭いがひどくて鼻が曲がりそうになつて、気分が悪くなるんだ。」

九官鳥 「僕達からしたら当然だよ。」

ミー 「カラスは嫌われてるの？」

九官鳥 「うん。」

ミー 「悪いことしてないのに？」

九官鳥 「君達がご飯を食べてるだけでも、人は迷惑なんだよ。」

ミー 「君は人に好かれてるの？」

九官鳥 「僕は人と友達だからね。」

ミー 「人は偉いの？」

九官鳥 「僕にとっては神様みたいなもんだよ。」

ミー 「そうかい、僕の友達が人に殺されたんだ。よくわからなかったけど、神様だったら仕方がないね。」

九官鳥 「そんなことがあったんだ・・・」

沈黙

ミー 「ねえ、そのご飯、一口くれないかい？」

九官鳥 「いいよ。」

ミー 「カゴに入るよ。」

九官鳥 「君の方からなら開くよ。中からはダメだけど。」

ミー、カゴの入り口を上に取り上げる。

ミー 「開けっ放しの方がいいねー。」

ミー、餌を食べる。

ミー 「おいしい！」

九官鳥 「だろう?! ゴミなんかよりずっと。」

ミー 「うん。ずっとこんなもの食べていたいよ。」

九官鳥 「そうだろうね。」

ミー 「人と友達だったらいいねー。」

九官鳥 「とつても幸せだよ。」

ミー 「そうかー。幸せかー。」

ミー、九官鳥の手をつかむ。

九官鳥 「えっ? 何?」

照明がフラッシュ状態に。

もみ合うミーと九官鳥。

立ち位置が入れ替わり、ミーは九官鳥をカゴから押し出す。

尻餅をつき、転がって行く九官鳥。

九官鳥は見えなくなり、カゴの中にミー。

ミー 「これでいい！」

ニッコリ笑うミー。

幕が降りてくる。

照明元に戻る。

ここは宮本の家。

宮本と妻と息子がいる。

宮本 「驚かずに聞いてほしい。父さん、決めたんだ。お前達には悪いと思っている。しか

し、諦めてくれ。父さんはカラスになる。」

妻 「カラス?」

宮本 「そうだ。カラスだ。」

息子 「鳥の？」

宮本 「鳥のカラスだ。」

妻 「よく考えてちょうだい。カラスって人間じゃないのよ。」

宮本 「だから鳥だ。」

息子 「仕事でもなんでもないんだよ。」

宮本 「だから覚悟を決めたんだ。人間やめて鳥になる。」

妻 「何で？」

宮本 「よく働いたから、もういいだろう。」

息子 「そういう問題でもないだろう。」

宮本 「新人が仕事を覚えた。お前ももう充分に大人だ。とうことは職場にも、うちにも父さんの居場所がないということだ。それなら、いっそカラスになっても構わないと思うんだ。」

妻 「あなた・・・」

妻と息子、盛大な拍手！

妻 「いい決断だわ。」

宮本 「えっ？」

息子 「俺ももう父さん、カラスになった方がいいんじゃないかと思ってたんだ。」

宮本 「いや、・・・えっ？」

妻 「カラスになっても、あなたはあなた。ちゃんとベランダに残飯を置いて置くから。」

息子 「えーっ、臭いに耐えられるかなー。」

妻 「じゃあ、やめときましょう。」

宮本 「いや、父さん、カラスになるんだよ。」

妻 「カラス頑張ってね。」

息子 「応援してるから・・・ス！」

2人、爆笑しながら去って行く。

宮本 「カラスになっちゃうんだよー。止めるなら今だよー。」

沈黙

宮本 「やっぱり『自殺するよ』とか『ホームレスになるよ』とか言えば良かったもかなー？
これは父さんのネガティブな心情を婉曲に表現しただけなんだぞ。そんな態度を取る

なら覚えてろ。カラスになるぞ。真っ黒になるぞ。結構、黒いけど。日焼けサロン行ったり、墨塗ったりするぞ。ご近所のゴミ箱あさるぞ。結構、自分のうちの父親がそんなことしてたら恥ずかしいんじゃないか？カラスになるなんて言わないでって頼まれれば、ならないこともないんだけどねー。ねえ、ほんとにカラスになっちゃうよー。」

沈黙

宮本 「よし、カラスになるぞ。いずれな。母さん、ご飯にしようか？」

宮本去って行く。

照明薄暗くなる。

ここは街。

ヒョコヒョコ出てくる九官鳥。

九官鳥 「あー、あんなに乱暴な奴だと思わなかったなー。あちこち痛いや。」

辺りを見渡す九官鳥。

九官鳥 「カゴから出るの初めてなんだよなー。怖いなー。野良猫や野良犬に会ったらどうしよう。」

わさわさと出てくるカラスの群れ（4羽）。中にファーとマーもいる。
九官鳥を取り囲む。

1 「見かけない奴だな。」

2 「何かちよつと変わってる。」

ファー 「あつ、思い出した！こいつ、九官鳥だ！」

ミー 「俺達の偽物だぞ。」

4羽 「偽物、偽物。」

口々に言いながら九官鳥の周りを回る。

九官鳥 「僕は偽物なんかじゃない。九官鳥は九官鳥で、カラスはカラスなんだ。」

1 「何か口答えしてるね。」

2 「生意気だな。」

フアー 「嘘ばかりつくんだ。」

ミー 「僕達は嫌われてるって。」

4羽 「嘘つき、嘘つき」

口々に言いながら九官鳥の周りを回る。

九官鳥 「嘘じゃないよ。本当のことなんだ。でも、あのー、どうでもいいや。僕は皆さんと

仲良くしたいだけなんだ。」

1 「仲良く？」

2 「冗談だろ？」

フアー 「カラスでもないくせに。」

ミー 「何ができるんだ？」

1 「金網のついたエサ場をこじあけることができる？」

2 「ドブネズミを丸のみすることが出来る？」

フアー 「散歩しているとき、突然、突っ込んでくる車をかわすことができる？」

ミー 「不意に飛び出してきた野良猫に襲われても逃げる事が出来る？」

九官鳥 「わかんないよ。いや、できないと思う。」

1 「何もできない奴だ。」

4羽 「何もできない、何もできない。」

口々に言いながら九官鳥の周りを回る。

1 「行こうぜ。」

4羽 「行こうぜ、行こうぜ。」

口々に言いながらカラス達、去って行く。

九官鳥 「・・・僕って本当に何もできないのかなー。」

そこに通りがかるはぐれガラス。

はぐれ 「おい、お前、見かけねえ面だな。」

九官鳥 「はい。僕は九官鳥です。」

はぐれ 「はー、噂には聞いたことがあるぜ。南の国にいるんだってな。ご苦労なことだ。」

九官鳥 「いえ、渡り鳥じゃありません。僕はカゴの中しか知りません。」

はぐれ 「なるほど。皆まで言うな。人間は勝手な生き物だ。」

九官鳥 「たぶん勘違いしてると思います。」

はぐれ 「こんな所に長居してちやまずいぜ。この辺じゃ危険だ。おっと俺がいるところはどこでも危険な匂いがあるけどな。」

九官鳥 「何のことだかわかりません。」

はぐれ 「カラスに会ったかい？」

九官鳥 「ええ、あなたに会う前に何羽かと」

はぐれ 「何だか可笑しかっただろう？」

九官鳥 「はい。あなたを含めて。」

はぐれ 「もうすぐ選挙でな。今、揉めてるところだ。」

九官鳥 「選挙？カラスにも選挙があるんですか？」

はぐれ 「大概、人間のやるムダなことはカラスもやる。」

九官鳥 「変なことを真似するのはやめましょうよ。」

はぐれ 「昔はカラスと言えば一匹狼だったんだけど、この頃つるみだしやがって。そうなる
と責任者がいないと安心して生活できないという意見が後を絶たなくなったんだよ。」

九官鳥 「もっともカラスってワイルドなもんだと思ってました。」

はぐれ 「俺のようなワイルドなカラスは、随分と住みやすくなって、住みにくくなったって

わけだ。」

九官鳥 「微妙な話です。」

はぐれ 「これからどうするんだ？」

九官鳥 「何の当てもありません。」

はぐれ 「俺についてくるか？」

九官鳥 「困ってたところなんです。お願いします。」

はぐれ 「残念だな。カラスは一匹狼だって言っただろう？」

九官鳥 「あなたが、『ついてくるか？』って言ったんですよ。」

はぐれ 「カラスは一匹狼だけど、九官鳥はどうでもいいんじゃないかな？」

九官鳥 「投げやりにならないでください。」

はぐれ 「仕方ないよ。九官鳥は九官鳥だ。カラスになれるわけじゃない。行くぞ。」

はぐれ ガラス去って行く。

九官鳥 「九官鳥は九官鳥？」

九官鳥、はぐれガラスについていく。

下手の幕が巻き上がる。

ここはカラスの選挙の演説会会場。

出てくるのは武闘派のカラス。

武闘派「本日はお集まり誠にありがとう。このたび立候補した、カラスです。まず、我々カラスが着手しなくてはいけないことは、もちろん人間問題です。この頃、人間との友好関係が崩れかけていると思うのは私だけでしょうか？」

いや、そんなことはない！と断言いたします。近頃は我々カラスに対する人間のリスペクトは足りません。昔、あつたのかどうかも疑問です。こんなことではいけません！

というわけで、私が当選した暁には最強のカラス軍隊を作り、人間に対して圧力をかけます。いざというときには、徹底抗戦をも辞さない覚悟でいきます。ハッキリ言つて人間がいない方がいいんじゃないでしょうか？スローガンは

『鳴かぬなら 殺してしまえ 人間』
です。」

次に上手の幕が巻き上がる。

出てくるのは知性派のカラス。

知性派「このたび立候補した、カラスです。私達、カラスの当面の課題は、弱者を救うことです。日に日に人間の我々に対する警戒は厳しくなっております。しかし、人間と争つて何のメリットがあるでしょうか？人間から逃れるようにココソと、しかし、人間の上前をはねることの方がカラスらしい生き方ではないでしょうか？

集めた食料は共有の食料として保管し、均等にわけましょう。策を練ること、これだけが人間と対抗しうる唯一の方法なのです。弱いカラスには募金活動も行います。黒い羽募金に協力ください。スローガンは

『くちばしは剣よりも強し』
です。」

武闘派と知性派、にらみ合う。

武闘派「どちら選ばれるか楽しみですが、カラスさん。」

知性派「本当ですね、カラスさん。」

そこへ飛び込んでくる九官鳥。

九官鳥「僕の話聞いてください。人と争ったり、人の上前をはねたりする以外の方法がありますよ。人と仲良くするんです。そしたら、人は喜んで食べものをくれますよ。」

武闘派 「そんな夢みたいなのが本当にあると本気で思っどるのかね？」
知性派 「非現実的な意見ですわ。」

九官鳥 「僕には九官鳥ならではの魔法の言葉がありますから。」

飛び込んでくるはぐれガラス。

はぐれ 「おい、馬鹿な真似はよせ！やめるんだ！！！」

はぐれガラスは九官鳥の手を引いて行こうとする。

九官鳥 「お願い。離して。こうすれば全て上手くいくんだから。よく聞いてください。人と

カラスは仲良くやっていきます！僕のような九官鳥が仲良く暮らしてたんだから。カ

ラスとも上手くやっていきますよ！絶対に！」

はぐれ 「さあ、来い！来るんだ！！！」

はぐれガラス、九官鳥を強引に連れて行く。

武闘派 「人と仲良く？」

知性派 「魔法の言葉？」

2羽、九官鳥が消えた方向を見る。

照明が暗くなり、後ろの幕が巻き上がる。

カゴの中にいるミー。

ここは九官鳥のいた部屋。

ミー 「あつ、人が帰ってきた。」

人がやってくる。

ミー 「ここだな。えーっと、オハヨウ、オハヨウだったな。よし。」

深く深呼吸をして、大きな声で叫んだ。

ミー 「アホー！アホー！」

驚いてカゴの方を向く人。

ミー 「アホー！アホー！」

ゴミ袋を持ちながら羽ばたきながら去って行く。

ここはカラスの訓練場。

九官鳥を筆頭にカラス達がやってくる。

カラス達は口々に

カラス「アホー。アホー。」

九官鳥「違います。よくくちばしの動きを見ていてください。こうです。オハヨウ。」

カラス「アホー。」

九官鳥「いえ、オ、ハ、ヨ、ウ。あなた、やってみてください。」

フアー「ア、ホー。」

九官鳥「・・・難しいとは思いますが。しかし、これができないと人と仲良くすることができ

ません。あなた、やってみてください。オ、ハ、ヨ、ウ。」

マー「オ、ハ、ア、ホ」

九官鳥「・・・惜しいー。実に惜しい。あともう少しでした。」

呆れ顔のはぐれガラスがやってくる。

はぐれ「あのさー。」

九官鳥「今、忙しいんで。後にしてください。」

はぐれ「言っとくけど、俺達はカラスで、お前は九官鳥なんだよ。」

九官鳥「ええ、わかってますよ。」

はぐれ「本当にわかってんのか？」

九官鳥「ええ、もちろんですよ。」

はぐれ「くれぐれもそこを忘れるなよ。」

はぐれガラス、去ろうとする。

九官鳥「一緒に練習しましょうよ。」

はぐれ「やめとくよ。俺、カラスだから。」

はぐれガラス、去って行く。

九官鳥は気にも留めず練習を続ける。

九官鳥「オハヨウ。」

カラス「オハアホ。」

九官鳥「オハヨウ。」
カラス「オハアホ。」

繰り返しながら出て行く。
カラス達の姿がなくなっても「オハアホ」の鳴き声が聞こえる。
次第に上手くなり、とうとう「オハヨウ」と聞こえるようになる。
そこにやってくる宮本。

ここは最初の公園。

宮本「はい、また、ここに来てしまった。あれ？耳がどうかなったかな？」

耳をすます宮本。

宮本「オハヨウ、オハヨウ？九官鳥がたくさんいるのか？」

這いながらやってくるミー。
右の羽が曲がっている。

宮本「どうした？羽が曲がってるじゃないか？！！！！誰がこんな酷いことをした？？」

宮本のところによくやくたどり着くミー。

宮本「可哀想に。代われるものなら代わってあげるのに。」

ミー「おじさん、代わってあげようか？」

宮本「君が言ったのか？」

ミー「おじさん、代わってあげようか？」

宮本「前にも一度言ってくれたね。わかった。代わろう。人間として生きてごらん。」

ミー「人間になれるの？」

宮本「ああ、そして、おじさんはカラスになる。」

2人「代わってあげるよ。」

照明がチカチカ、フラッシュ状態。

ミーはしっかり立ち上がる。

宮本は右は固まったままだけど、左だけで必死に羽ばたいて去って行く。
そして、照明すばっと消え、暗闇に。

暗闇の中、再び聞こえてくる「オハヨウ」の声。

次第に大きくなる。

照明元に戻る。

満足そうな九官鳥が立っている。

ここはカラスの広場。

九官鳥「君達はもう充分に『オハヨウ』って言える。きっと人に仲良くしてもらえるよ。さあ、行っておいで。」

「オハヨウ」の声が消えて、バサバサという羽音。

手を振って見送る九官鳥。

そこへやってくるバッグを背負ったはぐれカラス。

九官鳥「ねえ、聞いてた？みんな頑張ったんだよ。ちゃんとと言えるようになったでしょ。」

はぐれ「あのさーカラスはカラス。九官鳥は九官鳥なんだよ。」

九官鳥「わかってるよ。」

はぐれ「わかってないよ。何だよ、『オハアホ』って？」

九官鳥「オハヨウ。ちゃんと教えてあげるよ。」

はぐれ「いらねえよ。それが魔法の言葉か？」

九官鳥「そう、ちよっと頑張れば言えるんだ。」

はぐれ「違う。お前がガツクリする前に教えてやる。魔法の言葉なんてないんだ。」

九官鳥「なんで？ご飯がもらえるよ。」

はぐれ「それはお前が九官鳥だからだ。カラスの俺達がやってもくれるわけじゃない。」

九官鳥「そんなことないよ。人は優しいんだ。言葉さえ覚えれば。」

はぐれ「・・・お前はやっぱり九官鳥なんだよ。」

九官鳥「わかってるよ。」

はぐれ「わかってない。カゴの中にいる九官鳥は人間のものだから、当然、エサをくれる。」

しかし、野放しの俺達カラスにエサをくれる理由はないんだ。」

九官鳥「どういうこと？」

はぐれ「言葉は関係ないってことさ。」

九官鳥「ウソ？」

はぐれ「本当だね。九官鳥だからエサをくれる。カラスはエサをもらえない。それだけのことさ。」

九官鳥「違うよ。みんな、あれだけ頑張ったんだ。人間はエサをくれるよ。」

はぐれ「もうすぐわかるよ。もうすぐな。あばよ。」

九官鳥「どこ行くの？」

はぐれ「ここも居づらくなった。出て行くよ。」

九官鳥「僕のせい？」

沈黙。

はぐれ「じゃあな。」

はぐれガラス、去って行こうとする。

九官鳥「・・・僕は間違ったことをした？」

はぐれ「さあ、それは誰にもわからない。いい経験だったって言えるようにするんだな。」

九官鳥「きつと上手く行くよ！君が間違ったこと言ってるから、出て行くんだろう！ふん。」
マーが帰ってくる。

マー「あー。」

九官鳥「どうしたの？」

マー「おかしいんだ、人の様子が。」

九官鳥「どんな感じ？」

マー「今まではなんか目を細めて、チラツと見られてたんだけど、今行ったら見てもくれなかった。」

九官鳥「見てもくれなかった？」

マー「何か・・・気味悪がられてるみたいだな。」

九官鳥「気味悪がられてる？」

ファーが慌ててやってくる。

ファー「おかしいよ。誰もエサをくれない。」

九官鳥「えっ？！本当に？！」

ファー「みんな、意地になって声を張り上げてるよ。そしたら人間が逃げて行くんだ。」

九官鳥「逃げる？」

ファー「ねえ、どうなってるの？そのうちくれるの？」

沈黙

九官鳥「・・・ちよつと魔法の言葉を間違ったかなー。本当の魔法の言葉を教えるよ。」
ファー「そうだよな。良かったー。みんな、呼んでくるよ。」

フアーとマー、去って行く。

九官鳥 「九官鳥は九官鳥で、カラスはカラスかー。」

照明が薄暗くなる。

上手と下手の幕が巻き上がる。

それぞれ中に人になったミーとカラスになった宮本がいる。

カラスの宮本は何かを必死であさってる。

聞こえてくるフアーの声。

フアー 『おい、どこでめし食ってるんだ？』

宮本 「えっ？ここもダメなの？君の縄張り？ちよつとぐらいダメ？ダメ。ダメねー。いいよ、もう！」

ゴミ袋片手のミー。

ミー 「えっ？このゴミ袋、真っ黒で見えないだろ。これじゃあ、カラスがエサを探して散らかしてしまうじゃないか。」

聞こえてくる妻の声。

妻 『何言ってるの？カラスのためにゴミ出してるわけじゃないでしょ。』

ミー 「そうだけど。」

羽ばたく宮本。

宮本 「やっと飛べるようになったけど、羽は曲がったままだなー。」

ボンヤリ立ち尽くしているミー。

ミー 「仕事って何していいかわからないから、謝ってるだけ。これでいいの？」

前に出てくるミー。

ここはいつもの公園のようだ。

ミー 「はー、また、ここへ来てしまった。」

そこへやってくる一羽のカラス。もちろん宮本。

ミー 「おや、君も一人かい？おいで。いいものをあげよう。」

カバンからあんパンを出す。

ミー 「昼をかけそばで済ますとほんの少し余裕ができるんだ。あんパンかジャムパンか悩むのがささやかな幸せさ。さあ、お食べ。」

ミー、半分、カラスの宮本に差し出す。

宮本、あんパンを受け取ろうとする。

そのとき、不自然に曲がった羽が目に入る。

驚くミー。

それを見て気づく宮本。

相手が誰かわかった両者、見つめ合い固まる。

聞こえてくる九官鳥の声。

九官鳥 『これが本当の魔法の言葉だー！』

その声を合図に中央の幕が巻き上がる。

九官鳥を真ん中にしたカラスの軍団がいる。

カラス 「オカエリナサイ、オカエリナサイ、オカエリナサイ。」

何度も何度も繰り返される。

そのうち、九官鳥は黙り、うつむいていく。

カラス達はずっと続けたまま。

ミーと宮本はまだ固まったまま。

そして、ゆっくりゆっくり闇に包まれていく。

6 青い鳥はこなかった

上手の幕が巻き上がる。

出てくるのは相変わらず編み物を続ける男。

聞こえてくるナレーション。

男

『小鳥たちは編み物のように巣を作る。くちばしを器用に使って編み上げていく。中には海燕の巣のように高級中華料理の食材として、高値で取引されるものである。海燕はそのことを知っているのかな。僕が海燕だったらバンバン作って、売りまくってやる。』

それにしても海燕と比べて、普通の燕の巣は地味だ。藁と泥でできている。誰も買おうとは思わない。食べたいとは思わない。別に売る売らないは別として、やっぱり価値があった方がいい。人も鳥も住まいは財産だ。

そんな財産を勝手に利用する奴がいる。カツコウだ。自分で子育てしない鳥として有名だ。他の鳥の巣に勝手に卵を産みつけてしまう。親も親なら子供も子供で、卵から孵ったカツコウのヒナ鳥は、本来育つべきヒナ鳥を巣から放り出してしまふ。何も知らずに親鳥は、何の血のつながりもないカツコウのヒナ鳥を育てる。何ともやりきれない話だ。でも、別に僕が腹を立てる理由もない。ただ、こんなにだらしのない鳥に『もう起きちゃいか』と鳴かれる筋合いはないと思うだけだ。』

幕が降りてくる。

照明が元に戻る。

春木の部屋。

そこにいるのは春木。

聞こえてくるナレーション。

春木 『青い鳥が来ない。もう1時間以上遅刻だ。何してやがる！と思っていたのは、15分前までのこと。今ではもう青い鳥が来ないんじゃないかと思ってる。あの鳥が本当の幸せの青い鳥だったら、来ないだろう。2年も前に別れた彼女が今、どうしてるか知ったところで俺は『幸せ』になれるわけがない。わかってたけど、つい言ってしまった。未だに彼女のことを引きずってる俺に、青い鳥は本当の『幸せ』を教えようとしてくれるんじゃないかな？

済んでしまったことを忘れて、初めて先に進むことは幸せにつながる。

人の僕が鳥に教えられた。とても恥ずかしいけど、仕方がない。これで明日からスツキリして生きていける。ありがとう・・・青い鳥。」
ニッコリと笑う春木。

春木 『と、思っていたのは、ほんの今までのこと。僕はあることに気づいた。』
思わず声を上げる春木。

春木 「・・・あつ。」
春木 『俺、・・・4000円も払ってる。あいつ、青い鳥じゃなくてサギだったんだなー。あああああああーっ。』

ゆっくりと闇に包まれて行く。

下手の幕が巻き上がると、またも編み物をする男がいる。
そして、ナレーション。

男 『僕は知っている。鳩胸のくせに猫背の鳩を。』

僕は知っている。ヒクイドリという鳥が火を食べないことを。

僕は知っている。オウムが富士山麓で鳴かないことを。

僕は知っている。ヤンバルクイナが決して悔いなど残さないことを。

僕は知っている。カナリアが『かなりやな』奴だということを。

僕は知っている。アヒルが真昼にニヒルにダンヒルを買いに行かないことを。

僕は知っている。クマドリは鳥じゃなくて、歌舞伎の化粧だということを。

僕は知っている。ウグイスは椅子じゃないことを。

僕は知っている。シジュウカラは別に中年を励ましているわけじゃないことを。

僕は知っている。僕は知っている。僕は知っている。』

幕が降りてくる。

7 鶏を救え！

(例えばひとつのゲーム)

暗闇の中、聞こえてくる苦情の声。

女1 『あの一、おたくの鶏が朝早く鳴くもので、眠ってられないので、どうにかしてもらえないでしょうか？』

男 『朝っぱらからうるさいんだよ！鶏を黙らせろよ！』

女2 『小学校って人に迷惑をかけないように教えるところじゃないんですか？なのに、鶏をあんな時間に鳴かせるなんて、非常識じゃありません？』

照明元に戻る。

椅子に座った教師達。

メンバーは田上、村木、中田、山中、上川、本宮、そして、校長。

そこへスケッチブックを持ったミツルギ登場。

ミツル 「こんばんわ、ミツルギです。ここは今、小学校の職員室です。集まっているのは先生達。みなさんが先程お聞きになったような苦情の電話がこの頃、後を絶ちません。3年生が中心になって飼っていたヒヨコが鶏になってしまったからです。さて、彼らに鶏を処分すべきかどうか話し合っていたくださいますか？」

スケッチブックを開くと『処分するorしない』
話し合う教師達。

さて、ここでこのシーンのルールを説明いたします。根本的にエチュード(即興)

といたします。

ただ私が出した課題をクリアしてください。はずれた場合、私がホイッスルで止めて修正します。

ここでの決め事は

- 1・上川は絶対に鶏を擁護する。田上は処分したがる。校長はどっちでもいいが、面子だけを大切にしている。他の4人は状況を見て、変わっていく。
- 2・基本的に『火の鳥会議』のキャラクターでやりきる。

課題

- 1・どなたか多数決を取ってください。
- 2・最後の台詞は
「あー、鳥インフルエンザでもなんでもいいから、全滅してくれないかなー。」

ミツル「さて、この晩、鶏小屋に野良犬が放り込まれました。その犯人を決めてください。スケッチブックには『犯人を探せ!』」

- 1・うまく罪をなすりつけてください（実は私見てたんです）。
- 2・言い訳が苦しくなったら、素直に謝りなさい。
- 3・犯人が決まったら、校長が
「教頭先生も何か言いたまえ。」
と言う。

ミツル「あつ、忘れてました。」

スケッチブックには『教頭先生を早急に決めて。』

- 1・ここは校長が強引に決めてください。
- 2・教頭先生は教頭先生らしい言葉で犯人に声をかけてください（もしくは反省してください）。

ミツル「その後、うるさいおん鶏だけを処分することになりました。ここで嘆く人と喜ぶ人に分かれてください。」

スケッチブックには『泣くor笑う』

- 1・泣いてる人を慰めてください。
- 2・おん鶏はトラックに乗って行きました。どなたか、どこに行ったかを気にしてく

ださい。

3・ラストの台詞は

校長「動物園に行った。」

? 「よかったー。ちゃんと生きてるんですねー。」

校長「猛獣のエサになるんだって。」

ミツル「全てのおん鶏を乗せてトラックは出ました。が、1時間後、一羽のおん鶏が帰ってきました。さて、このおん鶏をどうしますか?」

スケッチブックには『残す or 処分』

1・ここは田上だけが反対派になってください。

2・一匹だけ奇跡的に帰ってきたおん鶏(名前をつけること)に純愛を感じて、美談にしてください。

3・最後は田上を除く全員による平井堅の『瞳を閉じて』を合唱して終わってください。

ミツル「このおん鶏を残すことになりました。が、この半年後、このおん鶏は頑張りまくってしまったため、60羽のヒヨコが生まれてしまいましたさて、どうする?」
スケッチブックには『全部残す or 一部残す or 全部処分』

1・田上と上川は全部残すことにこだわってください。

2・最後の台詞は

田上「いっそのこと小学校をやめて養鶏場にすればいいじゃないですか。」

ミツルギ、ホイッスルを吹く。

全員「そこまでできるかー!!」

一気に照明が落ちて暗闇に。

8 鶴に恩返し

照明が中央に灯る。

上手の幕が巻き上がる。

編み物をしている男がいる。

ナレーション。

男

『僕は知っている。信長、秀吉、家康の3人の個性を引き出したホトトギスは偉い。僕は知っている。ガンという鳥は名前のわりに元氣そうだ。』

僕は知っている。オシドリは引くことも知っている。

僕は知っている。メジロは目黒にも住んでいる。

僕は知っている。トキはただ数が少ないだけで、病弱じゃないし、北斗神拳も知らない。

僕は知っている。ハゲタカはみんな平等に老化していくので幸せそうだ。

僕は知っている。ワライカワセミの笑い声は鳥の鳴き声だ。

僕は知っている。僕は知っている。僕は知っている。』

上手の幕が降りてくる。

照明元に戻る。

上川が歩いてくる。

後を追って山中。

山中

「先生！」

上川 「あつ、先生。」

山中 「私、先生のことを見くびってたわ。でも、あの鶏を守ろうとする情熱に、頭が下がったわ。」

上川 「いえ、謝らないといけないのは僕の方です。まさか、この小学校が本当に養鶏場になってしまふなんて思わなかったもので。」

山中 「いいのよ。どうせ、小学校の低学年の担任も養鶏場の飼育員も仕事の内容はほとんど同じですもの。」

上川 「そうかなー。」

山中 「ただ気になったのは、どうしてあそこまで鶏に対してまで熱くなれるのかということね。どうして？」

上川 「鶏に限らず鳥全般的に好きなんです。」

山中 「私も。鳥っていいわよねー。」

上川 「ええ、空を自由に飛んだりするし。」

山中 「その上、牛や豚より脂肪分が少ない。」

上川 「絶対、話が合わないと思います！」

山中 「えっ、何か問題あった？」

上川 「僕は鳥の肉は食べません。僕にとって……僕にとって鳥は尊敬に値する存在ですから。」

山中 「鳥を尊敬？どういうことよ？」

上川 「話せば長くなりますが、……いいですか？」

山中 「ええ、いいわよ。」

上川 「あれは僕が大学に入った頃のことなんです。」

上川 だけ照明が照らす。

山中 はその場を去る。

代わりに入ってくる父と母。

椅子もセットされ、父と母は座る。

そこは上川の家。

照明元に戻る。

母 「お座りなさい。」

上川 「あっ？」

一人ボケーンと立っていたことに気づき、慌てて座る。

母 「今日はどうしても話しておきたいことがあるの。」

父 「一体どうした？藪から棒に。」

母 「私はとっても幸せ。とっても優しい夫ととってもよくできた息子がいて、どこの誰と比べても、この幸せな家庭が一番だって胸を張って言えるわ。世界一の家族よ！このまま、この幸せが永久に続けばいいな―って思っていたのに……。」

父 「今、気になる言い方せえへんかったか？」

母 「実は私、あなたたちに隠していたことがあるの。聞くときつと驚くわ。でも、驚かないで聞いて。」

父 「一体、なんやねん。早よ言いなさい。」

母 「実は……ダメ。言えないわ。驚かないって約束して。」

父 「もう何やねんな。わかった。約束する。」

母 「お前も。」

上川 「えっ？わかった。約束するよ。」

母 「良かった。これでハッキリ言えるわ。実は私、鶴なの。」

沈黙

母 「ツルなのよねー。」

沈黙

母 「鶴だっば！」

沈黙

母 「何で驚かないの？」

父 「驚かんと約束したからな。」

母 「ちよつとぐらい驚いていいのよ。」

2人 「ええええええーっ！！！」

大声をあげて、のた打ち回る父と上川。

母 「ちよつと落ち着きなさいよ。」

父 「鶴？鶴？鶴？嘘つけ！！！」

母 「嘘じゃないわ。本当なんでするつる。」

父 「無理して鶴を強調せんでも。」

上川 「どっから見ても人間じゃない。」

母 「鶴は化けるのよ。」

上川 「・・・論理のかけらもないけど、言い返せない。」
父 「ほな、鶴の証拠を見せてみい。」
母 「しようがないわね。」

母、立ち上がり、2、3歩ステップを踏み、手をバタバタ動かし、天を仰ぐ。

母 「今のが鶴の求愛ダンスよ。」
父 「微妙な証拠見せるな！」
上川 「何かもつとちゃんとした証拠はないの？」
母 「鶴には鶴証明書とかないからねー。」
上川 「あつたら余計怪しいよ。」
父 「百歩譲って鶴やとしよ。何で人間なって家庭持ってんねん？」
母 「ここまで言うと思いだしてくれるかと思ったのに。私はあの雪の夜、畏にかかって
いるところを助けていただいた鶴でございます。」
父 「あつ、あの時の！・・・って覚えあらへん。」
母 「忘れてしまったのね。」
父 「誰が畏にかかった鶴を助けるような経験忘れんねん。」
母 「あの時、あなたの顔を見てピーンと来たわ。この人、どうせ女にもろくに相手にされ
れず、結婚できるほどの甲斐性もないだろうって。」
父 「顔だけでそこまで判断するか？」
母 「どうせ私は畏にかかったところで一度死んだ身。だったら死んでしまつて地獄に落
ちて体を八つ裂きにされたと思つて、あなたに嫁ぐことに決めた。」
父 「この顔から一体、何を想像してん？」
母 「予想より数段、いい夫婦生活だったわ。」
父 「全然嬉しない！」
母 「慣れない人間の生活も、慣れてくると凄く快適で、つていうか快適過ぎてもうバカ
らしくつて鶴なんかやつてられないって感じ。レンジでチンよ！」
上川 「なんて自堕落な鶴なんだ。」
母 「そうこうしているうちにお前が生まれてね。私、心配だったのよ。鶴に生まれてく
るか、人間に生まれてくるか。」
上川 「そして、僕は人間に生まれてきたんだね。」
母 「ちようどほどよくブレンドされて生まれてきたんだよ。」
上川 「えっ？ブレンドされてんの？」
母 「ええ、背中から羽根がはえてくるんだよ。」
上川 「嘘！」
母 「お前が寝てるうちに、むしつてたんだよ。」

上川 「朝起きると背中がチクチク痛かったのは、それかー！」

母 「ええ、『寝ているうちに背中をかきむしったんでしょ?』とか言ってたけどね。」

上川 「そうだったのか!!!・・・父さん、僕は鶴と人間のハーフだよ！」

父 「お前、そんな簡単に納得できるなー。」

上川 「僕、思い当たるふしがあるんだ。僕、結構寒さにも強いし、他にも・・・思い浮かばないけど。」

父 「お前、寒さに強いだけで鶴とのハーフや言うんか。」

上川 「父さん、もっと現実を見ようよ。」

父 「その言葉、お前に返すわ！一体、どうなってんねん！」

母 「それもこれも私が今まで黙ってたのが、いけなかったのよね。」

父 「そういう問題でもないやろ。」

母 「でも、そうするしかなかったの。そうでしょ?あなたのうちに鶴が来て『結婚しましょう』と言っても断るでしょう?」

父 「断るも何も、気が動転して失神してるわ。」

母 「じゃあ、私のしたこともあながち間違ってたわけね。」

父 「えー、そうなるんか?」

母 「これで心置きなく鶴に戻るわ。」

父 「戻るんか?!?!」

母 「ええ、鶴であることを知られたからには。」

父 「じゃあ、言うな！」

母 「言っちゃったものを仕方ないでしょ?」

父 「言わなかったら、今のままおれたんと違うんか?25年間も一緒におってそれはないやろ?」

母 「元はと言えばあなたがいけないでしょ。」

父 「何でや?」

母 「結婚してすぐにあなた、会社クビになったでしょ。あの時、私が反物売って生活費を作ったじゃない。あれ、私が作ったの。」

父 「あれ親の形見や言うてたやないか。」

母 「いえ、私が。『開けないで』って言って、押入れにこもってバタバタしてたじゃない。自分の羽を抜いて反物を作ったの。」

父 「ようあんなとこで作れたな。」

母 「作ることよりも、首と足が邪魔で邪魔で。」

父 「で、何の話やねん。」

母 「そうよ、やっぱりあなたが悪いのよ。」

父 「どこが?」

母 「私は『開けないで』って言ったのよ。」

父 「そやから開けへんかったやないか。」
母 「なぜ開かないの？人間は『開けないで』って言ったら普通開けるでしょ？」
父 「いや、約束したから。」
母 「あの時、開けてたら、とっとと鶴に戻れてたんじゃない。こんなの生まれる前に。」
上川 「こんなの？」
母 「さあ、お前は どうするの？母さんについてくるかい？それとも父さんと残るか
い？」
上川 「わっ、いきなり生々しい現実的な話だなー。」
母 「現実を見ないと生きていけないよ。」
上川 「でも、この僕がついて行ったら鶴の母さんに迷惑かけるよ。」
母 「大丈夫、背中をむしらずに伸ばし続けると鶴になるんだよ。」
上川 「そうか！それならついて行ってもいいか。」
父 「待て！お前は残れ！お前は人間や。何でわし一人きりにならんとあかんねん。」
母 「それは本人が決めること。20歳までに鶴と人間どちらの国籍を取るか決めないと
いけないの。」
父 「国籍とは違うやろ？」
母 「おいで。もう充分人間やったでしょ？これからは鶴として生きてみてもいいんじゃない
かい？」
父 「いや、人間が一番やぞ。金があつたら何でも手に入る。便利やぞ。鶴なってみ、絶
対不便や。」
母 「何言ってるの。その何でも手に入れるのに必要なお金が稼げないんでしょ？お金の
ために今日も血が流れてるのよ。人間なんて情けない生き物よ。」
父 「何を言うてんねん。鶴なんかどんだけ長い距離を飛ぶと思てんねん。お前みたいに
どんくさい奴は、どっかに墜落や。もし、目的地まで着いてもエサ一つ取られへんや
ろ？人間や人間のままでおれ。」
母 「満たされ過ぎてるのよ、人間は。私はお前に空を自由に飛ぶ楽しさや、何日もエサ
を取ることができなかったところに食べるとじょうの美味しさを教えたいんだよ。」
父 「いや、大学で思いっきり遊べ。卒業してからは、思いっきり働け。社会に必要なとさ
れる人間になれ。」
母 「鶴だよねー？」
父 「人間やんなー？」
母 「鶴！」
父 「人間！」
上川 「ちよつともめないですよ！僕も急でわけがわかんなくなってるんだよ。」
母 「無理もないねー。しかし、こっちも急いでるんだよ。」
父 「わしもようわからんけど、人間でおってくれ。」

上川 「そんなどつちか選べって言われても……。それも普通の離婚だったら、たまに会っていいとか、そんな話になるんだろ？これはもう2度と会えないわけだよ？そんなの決められないよ。どうすれば、いいんだよ？」

母 「お願いだから今すぐ決めておくれ。父さんかい？母さんかい？」

上川 「……………母さん。」

母、ニツコリ笑う。

母 「お前……………」

上川 「ごめん！！！」

母 「えっ？」

上川 「僕、たぶんコンビニのいないところでは生きていけないと思うんだ。それにTUTA YAで借りたビデオを返さないといけないし。返すためには見ないといけないし。同じ学科でかわいい子みつけたんだ。友達になりたいなーって。今夜のボクシングのタイトルマッチも見たいし……………だから、人間でいるよ。」

母 「……………そうかい。お前が選んだんだから、しょうがないねー。母さん、行くよ。」

母、去ろうとする。

父 「なあ、どうしても行かなあかんのか？わしは鶴でも構わん。今まで通り、一緒におつたらあかんのか？」

母 「ごめんなさい。でも、鶴は鶴なのよ。こんな狭いマンションより、広いところでのびのび暮らしたいのよ。こんなゴミゴミした都会大嫌い。」

父 「そうか。わしは人間で、お前は鶴やもんな。しゃあないな。」

そこへサングラスにコートというスタイルの男登場。

コート 「おい、まだか？」

母 「すぐ行くから、もう少し待ってて。」

男、去って行く。

父 「誰やあれ？」

母、ドギマギする。

母 「・・・えっ？ああああ、私のお兄さん。」

父 「お前、身寄りがない言うてたやないか。・・・ハーン、お前、わし捨てて駆け落ちするつもりやな。」

母 「それは誤解よ！」

父 「急に『自分が鶴や』とか言い出して、おかしいおかしいと思ってたら、男ができてんな。25年も夫婦やったのに、何て薄情な女や！そんな女、こっちから離婚や！」

母 「いえ、だから・・・そうよ！何で一生うだつのあがらない亭主と一緒にいないといけないの？私だってもう一花咲かせたいわよ。年中、疲れた顔してポケーツとしているダメ男より、優しくしてくれる男の方がずっといいわ。」

父 「お前の顔なんかもう見たない！すぐに出て行け！」

母 「ええ、今すぐ出て行くわ！」

母、とつとと出て行く。

上川 「母さん！」

すぐに戻ってくる母。

遅れてさっきのコートの男。

スーツの男、父のすぐそばに来る。

父 「誰やねん。お前？」

コート 「いえ、怪しい者じゃありません。」

そういうとすぐに出て行こうとする。

父 「待て、帰るな。誰や言うてるやろ。」

コート 「私は鶴です。鶴は鶴でも行政側のね。」

上川 「行政側の鶴？」

父 「行政側かなんか知らんけど、鶴が何の用や？」

コート 「人間界にいる鶴を呼び戻しにきました。」

父 「呼び戻しに？こいつを？」

コート 「彼女だけじゃない。人間界にはいっぱいいますよ。」

コート 「ええ、鶴は人間に親切にされたら、恩を返さなくてはいけませんから。なぜか鶴は恩を返すとなると、昔から人間に化けて結婚相手になると相場が決まっていますから。法律でも定められています。」

父 「それやったら呼び戻さんでもええやないか。」

コート 「残念ながら、その法律は廃止されました。」

父 「何でや？」

コート 「人間の生態系を守ろうというのが建前です。しかし、本当は鶴が恩を返すに値する人間がいなくなったのです。」

母 「いえ、この人は」

コート 「いえ、そう決まったのです。鶴が恩を返しても何とも思わない人間がほとんどになってしまったのです。なのに我々が恩を返す必要があるでしょうか？そんな勝手が許されていないわけがない！だから、もう鶴は恩を返さなくてよくなったのです。」

父 「そうか。すまんかった。わしも全然感謝が足りなかった。これからはちゃんと感謝する。そやから、このまま居させてくれ。お願いや。」

コート 「もう決まったことなので、自分では何とも。お気の毒ですが、さあ、行こう。」

上川 「待って、母さん。」

コート 「母さん？」

母 「ええ、私の子供です。」

コート 「どういうことは？」

母 「いえ、人間です。」

コート 「背中に羽は？」

母 「一度もはえてきませんでした。」

コートの男、上川をなめまわすように見る。

コート 「まぎれもなく人間だ。」

母 「さあ、行きましょう。」

コート 「ああ。」

父 「待ってくれ。ちょっとだけ待ってくれ。思い出した。思い出したぞ！わしが小学生のときやろ？」

母、振り返りうなづく。

父 「小学生のとき、北海道のおばあちゃんのところに行ったことがある。へんびなとこや。

そこらじゅうに猟師が罾を仕掛けとった。いたづら半分にその罾を壊して回った。後でごっつい怒られた・・・あれのことか？」

母、うなづく。

父 「そうか！やっぱりあれかー！！良かった良かったー。」

無邪気に喜ぶ父。

その間に男に手を引かれ出て行く母。

上川、何も言えず、目で後を追うばかり。

父 「ハハハハハハハ、……あつ、いかんといてー!!!」

後を追って出て行く父。

それでもそこに立ち尽くすことしかできない上川のっそりと帰ってきた父。

父 「……ほんまに鶴やった。2羽の鶴が飛んでいきおった。ワーン。」

号泣する父。

それを見つめる上川。

泣いたまま出て行く父。

入れ替わりに入ってくる山中。

元の養鶏場。

上川 「母さん、行かないでー!……って、結局、言えなかったんです。」

山中 「へー、変わった話ねー。」

上川 「信じてもらえないでしょうね。」

山中 「その童話、何書房から出てるの?」

上川 「だから違いますって。これは本当に……まあ、いいや。」

山中 『鶴の恩返し』いや、『夕鶴』の方かな。何とも皮肉っぽいわねー、人間は恩を返すに値しないなんて。そうなるらと今度は人間が鶴に恩返ししないといけない番なのよ。

『人の恩返し』いや、『鶴に恩返し』って言った方がいいかしら。」

上川 「そうだ。その通りだ。恩を返さないと。この足で行ってきます。」

上川、飛び出して行く。

山中 「ちよつとどこ行くのよ!」

山中、後を追いかけて出て行く。

照明が青く、吹きすさぶ風の音が聞こえる。

そこは北海道。

遠くで鶴が鳴いている。

カメラを持った防寒着の男が歩いている。

反対側からジャンパーを羽織り、旅行カバンを持った上川が来る。

カメラ 「君も鶴の撮影かい？もつと早く来ないと。もう飛んで行っちゃったよ。」

必死で飛んで行く鶴を見る上川。

上川 「あつ、居た！！！母さん、僕だよー！今、大人になって会いに来たよー！母さんが出て行ってから、僕の背中には羽が生えてないよー！ちゃんと人間になったみたいだよー！これ、母さんに食べてもらおうと思って買ってきたんだ。母さんの大好物のコロッケだよー！！！」

カメラ 「何を言うのかと思ったら、・・・鶴にコロッケだなんて。」

バカにするカメラの男。

聞こえてくる大きな羽の音。

驚くカメラの男と喜ぶ上川。

羽の音が止まる。

カメラ 「鶴が・・・食べた！」

上川 「・・・母さん・・・」

満面の笑みの上川を闇が包んでいく。

9 編む男

下手の幕が巻き上がる。

案の定、編み物をしている男がいる。

ナレーション。

男

『僕は知っている。海猫は自分が鳥だということに気づいてない。

僕は知っている。カルガモはフェラガモとは別人だ。

僕は知っている。黄緑、深緑、風見鶏、さて、仲間はずれはだーれだ？

僕は知っている。ひな人形はひよこの人形じゃない。

僕は知っている。』

と突然、喋り出す男。

男

「できたー!!! 苦節3週間でこんなのできたー! ジャーン翼!」

背中に羽織る。

男

「秋の新製品、赤い毛糸製の翼! モデルは僕! おしゃれだけでなく、実用性にも優れた逸品です。それではテスト飛行に出発!」

そのまま飛び出して行く男。

しばらく無人の舞台。

男、すごすごと帰ってくる。

男

「ハハハハハ、飛べなかったー。近所の人にジロジロ見られたー。おかしな人を見るような目で見られたー。凄気持ち悪がられたー。飛ぶことはできなかったけど、その場から凄く浮き上がることができました。チャンチャン・・・うまいこと言って

る場合かー！」

翼を投げ捨てる。

男

「間違えたか？いや、そんなことはない。

『あたし、不器用な人だから、凄く器用な人に憧れるの。編み物とかできる人って素敵よね。男の人でもできたら凄いと思う。手編みのセーターなんてもらったなら、もう一生よろしくーって感じですよー。』

って言ってたらしいな。こうも言ってたって聞いた。

『男の人ってリンドバーグみたいに大きな夢を持って実現させないとダメですー。』
って。

この2つを要約すると『編み物で空を飛ぶ奴』だ。間違いない。もてるはず。少なくともリンドバーグより大きな夢を持つてるからな。

この毛糸は僕とあの子の赤い糸。だから編めば編むほど離れにくい関係になっていく。そうか！もつと大きな翼じゃないとダメなんだ！大きな翼で空を飛んで、あの子のところへ飛んで行くんだ。するとあの子は、エサを待ち焦がれていたヒナのように歓迎してくれるはず。よし、もつと大きな翼を作るぞー！」

再び編み出す男。

またナレーション。

男

『僕は知らない。彼女の名前を。

僕は知らない。彼女の電話番号を。

僕は知らない。彼女の住所を。

彼女は知らない。僕の存在を。

誰も知らない。僕が何日か後、毛糸でできた赤い翼で大空を飛びまわること。』

男は手を止め、空を飛んでいることを思い描き、天を仰ぐ。

やがて、ゆっくりと闇へ。

10 火の鳥のお見舞い

照明元に戻る。

と奥の幕が巻き上がる。

すると立ったまま毛布で寝ている紋次郎が現れる。

顔に包帯が巻かれている。

そこへやってくる赤い翼をヒラヒラさせた火の鳥。

火の鳥「山吹紋次郎さん、山吹紋次郎さん。」

紋次郎「はい？わしを呼ぶのはどなたですか？」

火の鳥「うちはあんたが一番会いたかったもんやって、言うたらわかる？」

紋次郎「ということは・・・王選手！」

火の鳥「違うわ！どこ見てんのよ！私、火の鳥や。」

紋次郎「えっ？火の鳥？！わしはこの歳まで探しても、みつからんかったのに、こんなところで。」

火の鳥「驚いた？」

紋次郎「いいや、驚きません。カバンの中も机の中も探したけれどみつからないのに、探すのをやめた時、みつかるのはよくある話ですからな。」

火の鳥「どっかで聞いた文句やな。」

紋次郎「で、何の用ですか？」

火の鳥「全身大火傷したって言うから、お見舞いに来ったのに、そんな言い方しなや。」

紋次郎「それはそれはご親切に。今、お茶でも入れます。」

火の鳥「あんた、絶対安静やろ？おとなしいしとき。そんなことよりな、聞きたいことがあるねん。」

紋次郎「ああ、そういうことならお答えします。セーラー服の似合う年上の人が好きです。」
火の鳥「別に女性のタイプ聞きにきたんとちゃうよ。・・・今、気になること言わへんかった？」

紋次郎「さあ、なんのことですか？」

火の鳥「まあ、ええわ。あんた、何で自殺しようとしたん？」

紋次郎「いいや、自殺なんて考えたことありません。」

火の鳥「ほな、なんで天麩羅揚げる鍋の中に飛び込んだん？」

紋次郎「あなたを探しに行ったんです。」

火の鳥「うちを？鍋の中に？」

紋次郎「今まであなたを探しに日本中歩き回りました。子供の時からです。でも、どこにもいません。この歳になってもです。あの日、天麩羅の鍋の中にできる泡が火の鳥の羽の模様に見えたんでな、飛びこんだわけです。」

火の鳥「で、うちは見えた？」

紋次郎「いいや、海老のしっぽが見えました。」

火の鳥「ハハハハハハ、うちはそんなところにいてないで。」

紋次郎「じゃあ、どこにいるのかのう？」

火の鳥「どこにでも居てる。火の鳥では目立ちすぎるから、雀なったり鳩なったり燕なったり鳥なったり、たまには風になるな。」

紋次郎「その辺にいるのに、わしはみつけれんかったんじゃな。」

火の鳥「うちはずーっとあんたを見てた。あんたのお父さんもそのお父さんもそのお父さん

もそのまたお父さんも、ずーっとな。」

紋次郎「みつかったら捕まえられるの？そんな危ない真似を？」

火の鳥「捕まえられへんよ。人間には無理やわ。」

紋次郎「はあー、やっぱりそうか。」

火の鳥「気づいてたんや。」

紋次郎「水で濡らした縄を首に引っかけて、水で濡らした竹で押さえて、岩を上に乗せる。」

火の鳥「いつまで原始的な方法を続けるつもり？」

紋次郎「みんなわかってました。わしのお父さんもそのお父さんもそのまたお父さんも、ず

ーっとこの方法では無理じゃろな。」

火の鳥「無理やとわかってて、代々受け継いできたん？」

紋次郎「はい。理由は誰も火の鳥を信じてなかったからです。」

火の鳥「信じてなかった？うちのことを？」

紋次郎「はい。きっと伝説の中だけの生き物だって。」

火の鳥「火の鳥ハンターのくせに。」

紋次郎「信じてない火の鳥を探して、無理だとわかってる方法で捕まえようとしてたんです。

結構つらかった。」

火の鳥「なんでつらいのにそんなことしてたん？」

紋次郎「火の鳥ハンターですからな、仕方ありません。」

火の鳥「やめたらええやん。」

紋次郎「他に何も知りません。他に何も人の役に立てることがありません。」

火の鳥「人の役に立つ？」

紋次郎「さあ、それはわかりません。でも、火の鳥ハンターです。きっと火の鳥ハンターでいたいんじゃない。」

火の鳥「・・・わかった。ほんまはわからへんけど、わかったことにしとくわ。そやから、その火傷治したるわ。」

紋次郎「治してくれるんですか？」

火の鳥「火の鳥やねんからお安い御用や。」

紋次郎「どうしてそこまで？わしのために？」

火の鳥「ほつといたら、あんたもうすぐ死んでまうやんか。それにな、あんたのためやない。うちのためや。」

紋次郎「あなたの？」

火の鳥「うん。そやかっつてあんた言うたやんか。『火の鳥はいる。ここに火の鳥ハンターがいるぐらいやから』って。あんたおらんようになったら、うちもおらんようになるやんか。」

紋次郎「あつ、そうなりますか？」

火の鳥「治ったら、うちを探しにおいでや。うちがあんたのすぐそばにおんねんで。捕まえろ。縄と竹と岩で。」

紋次郎「治ったら、あなたを捕まえに行きます。火の鳥ハンターですから。」

火の鳥「約束やで。」

火の鳥、大きく羽を一振り。ポロロロンと音がする。

火の鳥「明日の朝には嘘みたいに治ってるで。ほなな。」

火の鳥、去ろうとする。

紋次郎「ちよつと待ってください。」

火の鳥「何？」

紋次郎「お礼にお茶でも飲んでみてください。」

火の鳥「お茶？・・・うん、もうわ。飲んだことないし。」

紋次郎、一旦引っ込み、麦茶のペットボトルと湯呑を持って出てくる。

紋次郎「どうぞ。」

火の鳥に湯呑を持たせ、麦茶を注ぐ。

麦茶を飲み干す火の鳥。

火の鳥「ん？・・・何か・・・飲めば飲むほど喉渇くわ。たぶんうちが火の鳥やから、水分が蒸発すんねんわ。そやからものごっつい濃い味になってるんやと思う。」

紋次郎「えええええーっ！」

火の鳥「どうしたんよ、急に。」

紋次郎「火の鳥は物凄く濃い麦茶を飲んでる！大発見だ！火の鳥は人間の想像を絶するぐらい濃い麦茶を飲んでる！新聞の一面に載せてもらおう。火の鳥は濃い麦茶を飲んでる！」

興奮気味にはしゃぐ紋次郎。

呆れ顔の火の鳥。

だんだんと闇に包まれていく。

暗闇の中、ザワザワとした声が聞こえる。

口々に「水道」とか「まだ駄目」とか言っている。

照明が戻ると役所の面々が立っている（受付と宮本を除く）。

課長「ちよっといっぺんに喋られてもわからん。一人ずつ言いたまえ。」

全員「水道が出ません。」

木村「本館の1階も。」

田中「本館の2階も。」

中山「本館の3階も。」

川上「別館の1階と2階も。」

全員「水道が出ません。」

課長「で、どういう処置をした？」

全員「確認しました。」

木村「本館の1階も。」

田中「本館の2階も。」

中山 「本館の3階も。」

川上 「別館の1階と2階も。」

全員 「確認しました。」

課長 「待て、確認したただけか？」

全員 「はい。」

木村 「はい。」

田中 「はい。」

中山 「はい。」

川上 「はい。」

全員 「はい！」

課長 「水道屋呼べよ。」

全員 「えっ？」

木村 「えっ」

田中 「えっ」

中山 「えっ」

川上 「えっ」

全員 「えーっ????」

課長 「水道屋呼べ！今すぐ！」

4人、走って行こうとする。

課長 「全員で行かんでいい！君達、チームワークというものを間違えてるぞ。」

川上 「あれ？課長、テレビ見てください。」

上手の幕が巻き上がる。

アナウンサーが出てくる。

アナ 「ニュースです。先日、奇跡的な回復力で退院した世界唯一の火の鳥ハンター、山吹紋次郎さんが、今朝6時20分に高井山の森林地帯で、幻の動物、ツチノコの捕獲に成功しました。」

奥の幕が巻き上がる。

すると得意気にツチノコを振り回す紋次郎が現れる。

アナ 「ついに幻のツチノコを捕獲したということで、世紀の大発見と言えそうです。」

下手の幕が巻き上がる。
現れるのは火の鳥。

火の鳥「ちよつとあんた、違うやん！」

複雑な表情の役所の面々。

全員 「んーん、微妙ー。」

ゆっくりと闇の中へ。

END

11 カーテンコール

軽快な音楽。

照明元に戻ると全員整列。

役者の紹介を一人ずつして終了。

全員が去ってから、音楽が大きくなり、照明が暗くなっていく。
やがて闇の中。

12 おまけ

音楽が高鳴るところでプツンと切れ、そこで照明がつく。

そこにいるのは春木。

退屈そうにしている。

そこへ登場する鶏にしか見えない青い鳥。

青い鳥「ごめーん。道間違えて2日ほど無駄にしてみました。やっと今辿り着きました。はい、バナナ。」

春木「お前・・・アホウ鳥だったのか？」

青い鳥「・・・はい。」

照明すぱっと消える。

これで本当にEND